アンラーニングプロジェクト09

2009. 8. 30

生・労働・運動ネット
富山市神通町3-5-3
TEL 076-441-7843
FAX 076-444-6093

ニューズレター

「グローバル経済の破綻は、私たちの失敗ではない――『今のようではない生』の創造の〈鍵〉をさぐる」(8/2)での論議から

8月2日(日)、「アンラーニングプロジェクト09」では、小倉利丸さん(富山大学)を「招待」して、今年度の「アンラーニング」のテーマと同じく、「グローバル経済の破綻は私たちの失敗ではない――『今のようではない生』の創造への〈鍵〉をさぐる」というタイトルで、学習会を行いました。以下、そこでの論議のアウトラインを紹介します。

□人間の必要に根ざさない資本主義経済システムを問う

長きにわたり全世界を席巻してきたグローバル経済システムが、今や完全に破綻してしまい、かってグローバル経済路線を積極的に推進してきた者たち自身がそのことを「懺悔」するような状況になっています。それでは、しかし、それ以前の経済政策に戻ればいいというだけでは、大きな限界があるように思います。

第二次大戦後、いわゆる「先進国」では、政策的にかなり大きな幅や違いがあるにせよ、社会保障・福祉政策を通じて、国家が所得の再分配を行う「ケインズ主義」的な政策路線が主流となっていました。その路線の見直しのきっかけとなったのが、ベトナム戦争の泥沼化や、70年代初頭の石油危機でした。それらによる先進国中心の世界のパワーバランスの揺らぎの立て直しの中で、国家による資本への規制・コントロールへの批判が唱えられ、新自由主義が登場する契機になりました。今、それが逆転して、「ワーキングプア」層の増大や雇用の不安定化に対して、改めて企業への規制やセーフティーネットの構築の必要性が盛んに唱えられるようになってきています。しかし、ケインズ主義であれ、新自由主義であれ、資本主義的経済システムを前提としているという意味では大差ありません。

もちろん、ケインズ主義が所得の再分配や政府による資本のコントロールに重点を置いているのに対して、新自由主義では資本に対する法的な規制をそぎ落として「民間主導」で経済システムを運営していこうとするという違いはあります。しかし、そのように、政府と市場との関係をめぐる制度設計では違っていても、資本が経済活動を通じて利潤を上げることを前提として、経済が停滞すれば労働者も「食っていけない」ということで、資本主義の存在を肯定しているという点ではどちらも同じなわけです。

それでは、資本主義がなぜ問題なのかということなのですが、本来、経済システムの基本は衣・食・住といった人間のベーシックニーズを満たすためのもののはずです。「『今のようで

はない生』の創造への〈鍵〉をさぐる」と言う時に、資本主義というものがこの社会の中で人々が生きることを本当に支えるためのシステムとなっているのかということが、大きなポイントであるように思います。資本主義経済は、企業が利潤追求のための商品生産を行い、その商品を市場を通じて手に入れることで生存を維持するという、回りくどいシステムなのです。ですから、「お腹がすいたからご飯をつくる」というのではなくて、企業が工場で生産された食品を買って空腹を満たそうとする人たちを目当てに生産するということになります。製紙会社にしても、自分たちが紙をどう使いたいかということなしに樹木を伐採して紙をつくるわけです。

そのように、実際の要求や必要性とは無関係に生産活動を行うので、商品として売れる限りは、資源を無限に消費するという構造になっています。また、資本主義経済の下では、労働者が自らを「労働力商品」として企業に売って得た賃金で商品を買うことでようやく生存が可能になるわけですが、その上で、個々の企業では担いきれない経済システム全体の制度設計や企業間の利害調整については、国家にゆだねるということになっています。

マルクスは「労働力商品の廃棄」と「国家の廃棄」を唱えていますが、現在、これらは次の社会のあり方を考える上で改めて大きな意味をもつようになってきているのではないでしょうか。現在、資本主義経済システムの下で生きていけないということが多くの人々の共通認識に成っているような状況の中で、「労働力商品の廃棄」、つまり、企業に自分の労働力を「商品」として売らなくても生きていけるということが改めて大きなリアリティーと意義を獲得しつつあるように思います。また、同時に、国家に変わる非権威主義的なルール設定や意志決定のための仕組みが強く求められているように思います。

現在の社会では、人間が人生の大部分の時間を働いて賃金を得ることのために費やさざるを得ないようになっていて、人間の価値と労働とが分かちがたく結合しています。しかし、私たちとしては、現在のような労働の中に人間の尊厳を支えるようなものが本当にあるのかということ自体を問わざるを得ませんし、そうではない「生」のスタイルをどのように模索していくのかを考えることが求められているように思います。

□マルクスによる問題提起――「労働による平等」はありえない

狩猟採集経済に基づく「未開社会」というと、貧しくて食べるものにも事欠くぎりぎりの生活をしているというイメージがあると思います。しかし、これは人類学者の驚くべき「発見」なのですが、狩猟採集社会で人間が必要を満たすための労働時間は一日わずか3、4時間に過ぎません。シカゴ大学の人類学者のマーシャル・サーリンズはそのような社会のあり方を逆説的に「豊かな社会」と呼んでいます。「今のようではない生」というのは決して「夢物語」ではなく、具体的にそれを思い描くのはなかなか難しいことにせよ、こういった話というのは、それをイメージする上でのある種の手がかりになるのではないかと思います。

資本主義の歴史とは、一言で言えば、農業といった自然との関わりから、工業生産といったモノへの関わりへの生産様式の転換の歴史です。つまり、資本を投入する時に、農業と工業とのどちらを選択するのがより有利かといえば、技術の進歩による生産性の大幅な向上が可能だという意味では、工業の方が大きな収益が見込めるわけです。逆に、基本的に自然に依拠する農業では、収穫のスピードアップというのは無理ですし、台風や干ばつなど、予測不可能だったり、人間がリスクをコントロールできない部分がたくさんあります。そのような投資効率の最大化やリスクの回避の行き着いたところが、「金融資本主義化」であり、結局、それが「サブプライムローン」問題といった金融システムの不安定化を引き起こしてしまうのですが。

機械は設計図通りに動きますが、労働者は常に資本家の期待通りに働くとは限らないという意味では、人間の予測不可能性自体が資本にとっての最大のリスクですので、資本家は人間をできるだけ機械に置き換えようとします。今、工場からはどんどん人間が減ってきていますが、その一方で、最近の労働の多くは、モノをつくるのではなく、人間の相手をすることが多数を占めるようになってきていて、他者とコミュニケーションをすることが主な仕事の内容になっています。そうした他者とのコミュニケーションの結果としてようやくモノが売れるというふうになっています。

その意味では、もはや単に自分の労働力を売るというよりも、言語を通じて他者とコミュニケーションするという人間の人格の根底にあるようなものを資本に売り渡すことになりますし、労働者は限りなく「経営者」になりきることを要求されます。また、ファーストフード店で働くような労働者は機械で置き換えることはできないのですが、そこではまさにマニュアル通りの機械的な労働を強いられるわけです。このような資本による経済効率性の飽くなき追求や、生身の人間に不可避的に内在する予測不可能性の排除がもたらした労働の「変質」状況の中で、労働の意味や価値をめぐって、かってとは違う形で大きな問題が生まれてきているように思いますし、従来のような労働運動ではない、資本主義から自らを「切断」するような運動が求められているように感じています。

今でも全くそういった傾向が無くなったというわけではありませんが、かっての左翼的な運動の世界でも、労働者は資本家による搾取から解放されるべきだと主張はしていても、労働それ自体は人間が社会を有意義に形成する上で価値があり、尊いものであるとして肯定的に捉える見方が一般的だったように思います。マルクスもそう取られかねないような言い方をしているところがありますが、マルクスの最晩年の労働観を示すものとして、彼の「ゴータ綱領批判」の一節を紹介したいと思います。

その中で、彼は、奴隷的な労働からの解放や、精神労働と肉体労働との上下関係を否定しています。また、彼は、労働者が労働能力の差によって異なる待遇を受けること自体を否定しています。つまり、誰であれ差別なく、稼働能力や労働の成果に応じて給付を受けるという「労働者の平等」は、「不平等な個人的天分」と「不平等な給付能力」を「生まれつきの特権」として黙認するものであり、「労働による平等はありえない」として強く否定しているのです。そのように、マルクスは、人間同士の違いを認めた上で、誰もが等しく生きる上で必要なものを手に入れることができるべきだし、労働を人間の唯一の基準にすべきではないと訴えることで、資本主義的な労働観を否定し、「労働者」という範疇から暗黙の内に除外されている女性や障害者といった社会的なマイノリティーも含めて、人間の解放を考えようとしたのです。

「今のようではない生」というのは、自分としては今のところ、利潤や効率性を追求するのではないといったように、あくまでも「否定形」でしか言うことしかできません。それを敢えて一つの比喩として言うと、例えば、たった一人の読者のために、小説を書いて生活するというようなことを許容するような社会ということではないかと思うのです。現在の資本主義社会では、創作活動をして生きようとすると、自分が創作した音楽のCDや小説が、ある程度は商品として売れなければ生活できません。しかし、商品として売れるか売れないかということと、作品として価値があるかということとは全く別のことのはずです。

結局、売れないアーティストや小説家は食っていけないので、「本業」である創作活動以外にアルバイトをして生活しているわけですが、創作活動の成果が「商品」として売れなければ好きなことをして食っていくことはできないという前提条件自体が変わるべきだと思います。一人の読者というのは極端な言い方ですが、読者が10～15人ぐらいでも小説を書いて生きるということがあってもいいんだというのが、「今のようではない生」という時の自分なりの一つのイメージです。

□「連帯経済」に向けた一つの試みとしてのアルゼンチンの「再生工場」

今ほど、アルゼンチンの首都のブエノス・アイレスで、倒産したクリーニング工場を労働者が自主占拠・自主管理している映像を紹介しましたが、そこにもありますように、その工場では、経営のためのデスクワークをする労働者も、クリーニング作業をする労働者も時間あたりの給与は同額で、職場内のヒエラルキーを否定して工場を運営している点が興味深いと思います。

このように、倒産した工場を労働者自身で自主管理して運営しているものを「再生工場」と言うようです。もう少し補足しますと、それに法的な根拠を与えているのは、アルゼンチン全体に関わる法律というよりも、日本で言えば条例にあたるような州レベルの法律です。その法律によって「再生工場」に認定されれば、州が倒産した工場に債権をもつ銀行からその工場を買い取った上で競売にかけますが、自主管理している労働者たちにその工場を買い取る優先権が与えられ、その分の金額を長年をかけて労働者たちが州に返済していくという形になります。

「グローバル経済の破綻は私たちの失敗ではない」という今日の話のタイトルにもありますように、このような「再生工場」の試みは、国家レベルの経済破綻とは別に民衆レベルで生存を支え合うことは可能であり、民衆がどのような創意工夫で、新しい経済のあり方をつくりだそうとしているのかという一つの例であるように思います。もちろん、このような試みが「今のようではない」社会を生み出すことにそのまま、直結するわけではありませんし、理念として社会変革をめざすというよりも、その職場を失えば他に仕事が見つからないという切実さが労働者が工場を自主占拠・自主管理することに向かう大きな原動力になっているように思います。

しかし、そうではあれ、今回の映像の後の方では、同じく自主管理を行っている病院と連携していく場面もありますが、危機的な時代状況だからこそ、逆に新しい経済や社会のあり方を模索することが可能になっているということがあるのではないでしょうか。

「会社があるから、お前たち労働者も食っていけるんだろう」ということで、私たちは日頃から非人間的な労働のあり方に対してひたすら忍従を強いられているわけです。しかし、この「再生工場」の例のように、企業が倒産しても労働者が支え合って職場を運営している姿は私たちに大きな希望を与えてくれるものですし、この国に生きる私たちも、現在の危機をどのように自分たちにとってのチャンスにできるかが問われているように思います。

アンラーニングプロジェクト09――次回の予定

●第6回　10月11日（日）午後1：30～4：30　サンフォルテ306号室

報告：「まち／むらが編み上げあう『モラルエコノミー』の再生――ミニ・シンポ『まちの困民・むらの困民08』報告書＋大野和興・西沢江美子『食大乱の時代』（七つ森書館）を読む」